

CALLおよびe-learningシステムを活用した 英語指導の意義・効果・課題

Effects and Problems of Employing CALL System to Improve English Proficiency

江利川 春 雄

ERIKAWA, Haruo

(和歌山大学教育学部英語教室)

2017年9月14日受理

要旨

小論は、大学の外国語教育にCALLおよびe-learningシステムを導入する意義、その効果(特に学生の情意面での肯定的評価)、浮上した問題点(利用教員の僅少さ、メンテナンスの人的・費用的困難さ、費用対効果の乏しさ)、今後の課題(予算・人員の継続的確保の必要性)等について考察した実践報告である。理想的な語学教育にはCALLおよびe-learningシステムが必要不可欠であることを大学執行部に訴えて導入を実現させたものの、様々な課題に直面し、理想と現実のはざまで呻吟しつつ実践を続けたが、最終的には予算の制約などからシステムが廃止されるに至った。他山の石としていただきたい。

1. はじめに

本稿は、大学の教養教育における英語授業にCALL(Computer-Assisted Language Learning)システムを導入する意義と、実践を通じて得られた効果と課題を考察するための実践報告である。

筆者は2006年度よりe-learningシステムであるALSI社製SMART-HTMLの英語教材コンテンツを活用した教養教育の英語授業を担当した。e-learningとは、インターネットを通じて学習を行うことで、コンピュータシステムによって支援された言語学習一般を指すCALLの一構成要素である。

CALLシステム導入の目的は、教員、時間指定、教材等に拘束されていたこれまでの「閉鎖型」の英語授業に、CALL(とりわけe-learning)を組み合わせることで、自宅等でも学習可能な「開放型」の外国語教育体制を構築することである。その概要は表1および図1

の通りである。

2. CALLの概要とコンテンツ

〈和歌山大学におけるCALLの概要〉

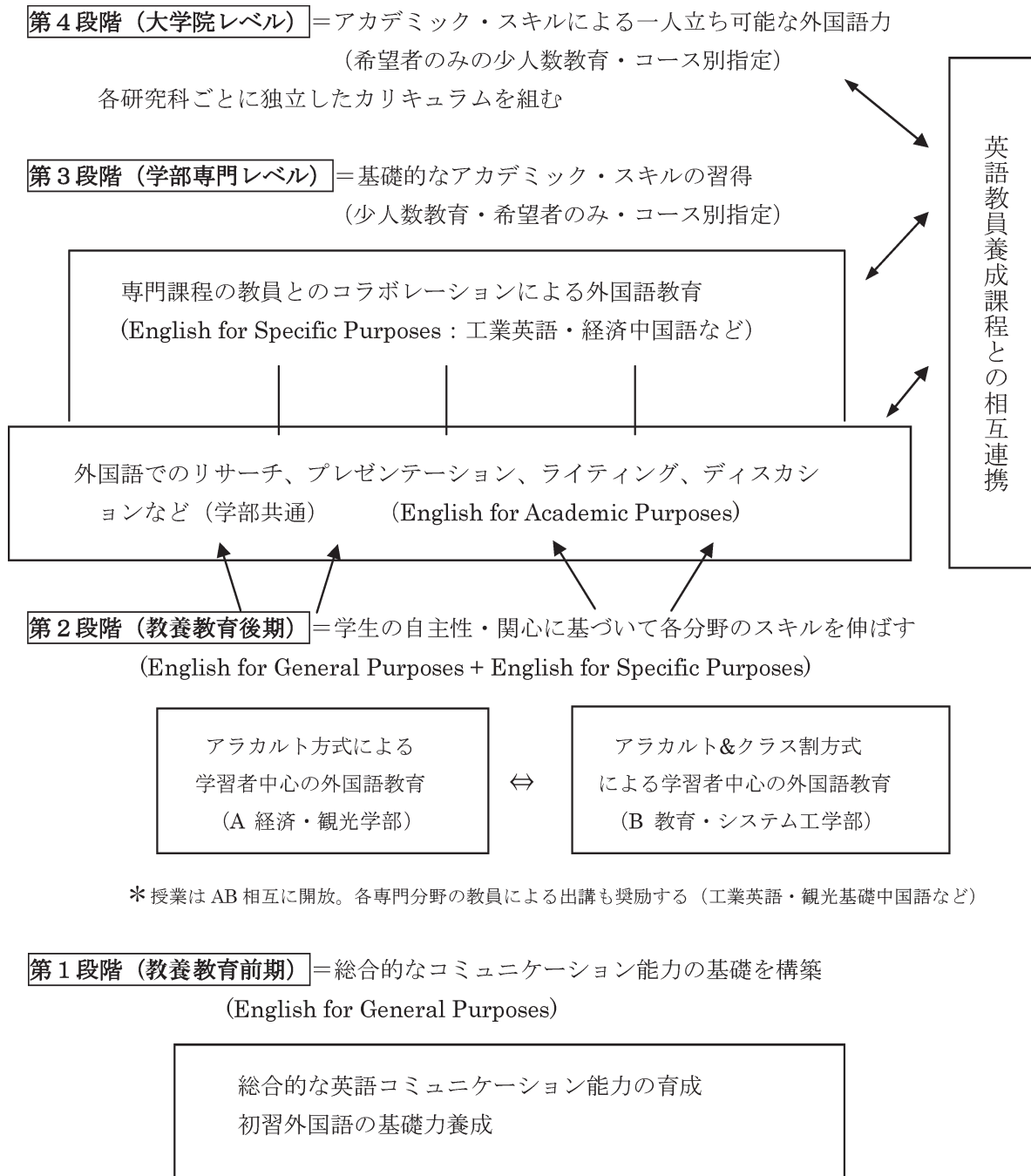
- ・導入サーバ：本学システム情報学センター内Webサーバ
- ・利用可能者：本学システム情報学センターにアカウントを持つ学生・教職員。最大登録可能数はライセンスの関係上1,000名まで(2007年度より2,000人に増強)。利用者はインターネットを経由し、学外からでも本システムを利用することが可能である。

〈英語関係のコンテンツの一部〉

- ・英文法徹底トレーニング(旺文社デジタルインスティテュート)

表1 CALLを活用した授業改革の概要

講義による「閉鎖型」	CALLによる「開放型」
<ul style="list-style-type: none"> ・「授業」(コマ)への閉鎖型 ・教師主導 ・週1回90分のみ ・1・2学年のみ ・分野・レベルの制約大 ・再履修者の負担大(時間拘束) ・1教員で1クラスのみ ・遠隔地教育が困難 ・紙と鉛筆型 	<ul style="list-style-type: none"> ⇒「授業」+e-learning(CALL)による開放型 ⇒学生主体の自主学習を重視 ⇒自宅を含む無際限の英語学習が可能 ⇒卒業時まで学習可能、院生・教職員も可能 ⇒多様なプログラムの選択可能 ⇒再履修者の負担軽減(時間拘束の緩和) ⇒1教員で複数クラスの担当可(人的負担軽減) ⇒遠隔地教育が可能 ⇒コンピュータ活用(TOEIC等対応)型



* 授業は AB 相互に開放。各専門分野の教員による出講も奨励する（工業英語・観光基礎中国語など）

各段階で *e-learning (CALL)* を活用する。
 英語検定試験(*TOEIC* 等)に対応する。

(注) 本図は共同研究者だった遠藤史教授（経済学部）作成の資料を改変した。

図1 専門教育と連携した卒業・修了時までの外国語能力の育成(モデル図)

- ・英文速読・語彙 徹底トレーニング<初級編> (同上)
- ・英文速読・語彙 徹底トレーニング<中級編> (同上)
- ・TOEICテスト完全攻略 (同上)
- ・TOEICテストスーパー模試シリーズ 600点攻略 (同上)
- ・TOEFLテスト完全攻略
- ・CUBIC LISTENING Pre-Intermediate
- ・英検全問題シリーズ <2級>
- ・新TOEICテストハイパー模試 など

なお、登録された教職員であれば、自由に利用可能なコンテンツ作成への支援ソフトが付属しており、それを用いれば語学教育にこだわることなく、独自のコンテンツを作成可能である。

3. 授業の実際と学生の反応

筆者は2006年度の試行期間を経て、2007年度より教養教育の英語の3クラスで部分的にCALLを取り入れた授業を行った。「部分的に」というのは、紙媒体の教科書を使った授業も行い、主に学期の後半にシステム情報学センター演習室に学生を移動させてCALLを使用させた。その際に学生には以下の2点を指示した。

- (1)学内外からのCALLへのアクセス時間(教員が把握できる)を成績に反映させるので、積極的なアクセスを求める。
- (2)CALLを使った授業では、30分程度の同一問題による試験を実施し、そのスコアを成績に反映させる。

つまり、通常授業の成績(出席状況、小テスト、定期試験)とCALLによる成績とを加味して最終評価すること、および仮に英語が苦手でもアクセス時間を増やして努力すれば成績評価が向上することを示した。特に後者は、英語に苦手意識をもつ学生の意欲を刺激し、好評であった。

実際にCALLで学習した2007年度後期「英語C4」(教育学部2年生中心)に実施したアンケート結果(表2)をもとに学生の反応を考察してみよう。なお、このクラスはTOEICの上級レベルをめざす学生を対象とすることをシラバスに明示しているが、実際には上級希望でなかった学生も少なくない。前半の授業(10月5日から11月30日まで、週1回90分)は紙媒体の教科書による「閉鎖型」の授業であり、後半(12月7日から1月29日まで)はCALLによる「開放型」の授業である。アンケートは後半の3回目で実施したものであり、サンプル数も限られていることから安易な一般化は危険であるが、およそその傾向は把握できると思われる。

表2 CALLを使った英語授業に関するアンケート結果

2007年度後期「英語C4」クラス、2007年12月21日実施。回答者22人(男5・女17)。うち2年生20人、3年生1人、大学院生1人(聴講生)。

- ① 授業時間以外に、大学でCALLシステムにアクセスしましたか。
a. した。59%
b. しなかった。41%
- ② 授業時間外に、学外(自宅等)でCALLシステムにアクセスしましたか。
a. した。50%
b. しなかった。50%
- ③ CALLシステムでTOEICの成績は向上すると思いますか。
a. とても向上すると思う。32%
b. やや向上すると思う。64%
c. どちらとも言えない。4%
d. あまり向上しないと思う。0%
e. まったく向上しないと思う。0%
- ④ CALLシステムによる英語の授業をどう思いますか。
a. とても良いと思う。27%
b. かなり良いと思う。45%
c. どちらとも言えない。28%
d. あまり良くない。0%
e. とても良くない。0%
- ⑤ 大学での授業形態は次のどれが望ましいと思いますか。
a. CALLを使わない通常授業。5%
b. 通常授業とCALLを組み合わせた授業。86%
c. CALLを中心とした授業。9%
d. どちらともいえない。/わからない。0%
- ⑥ 授業や単位とは無関係にCALLシステムを利用したいですか。
a. ぜひ利用したい。32%
b. できれば利用したい。59%
c. どちらともいえない。9%
d. あまり利用したくない。0%
e. ぜったい利用したくない。0%
- ⑦ 特に良いと思ったソフトはどれですか。(複数回答可)

- 1位 「英文法徹底トレーニング」(11票)
- 2位 「TOEIC完全攻略」(9票)
- 3位 「英文速読・語彙徹底トレーニング」(5票)
- 4位 「TOEICテストハイパー模試」(3票)

⑧ CALLシステムについて意見・感想を自由に書いてください。

〈肯定的意見〉

- ・うまく活用できれば、すごく勉強しやすいし力がつくと思う。
- ・自宅ででき、良いわりに無料なのが良い。
- ・書籍よりも良い。音声問題ができるのがいい。
- ・授業を欠席しても後から勉強できるのでいい。
- ・授業外での努力を成績に反映してくれるのがいい。
- ・期限のある課題とは別でコツコツ勉強できるところが素敵。

〈要望・改善意見〉

- ・昨年、英文法の授業でも利用しましたが、問題が同じでした。更新はできないのですか。
- ・授業をとっていなくても、CALLシステムを使うようにしてほしい。
- ・英検の準1級、1級のコンテンツの追加と、各セクションの「回」の数の増加を希望。
- ・全てマウスによる操作だったので、キーボードによる操作ができるものを増やしてほしい。
- ・今やっているところはどこかをタイトルで分かるように(色変換)。
- ・一度間違った問題を効率的に見直せるように、間違った問題には色がつくなどでできればいい。
- ・テストでどこを間違えたのか分からない。
- ・同じ問題をやっているとうれいがあるのではないかと思います。
- ・問題の解説が文法、語彙力を前提にしたもので、英語が苦手な私には難しく感じた。

【結果の考察】

以上のアンケート結果から、以下の諸点が考察される。

- ・CALL開始後3週間目であったにもかかわらず、授業の時間以外にアクセスした学生は、大学からが59%、自宅からが50%ある。「授業や単位とは無関係にCALLを利用したい」とする学生が91%であることと併せて、CALLによる「開放型」語学教育の豊かな可能性が示されたといえる。
- ・「CALLシステムでTOEICの成績は向上するか」との問に対して96%もの学生が肯定的な回答をしている。否定的な見解はゼロである。
- ・CALLシステムによる英語の授業をとて／かなり「良いと思う」学生は72%であり、否定的な意見は

ゼロであるから、おおむね肯定的である。

- ・授業形態としては「通常授業とCALLを組み合わせた授業」を望む学生が86%にも達している。CALLを使わない授業を希望する学生が5%にすぎないのは、受講生が目指すTOEICがコンピュータ・ベースの試験であることも影響していると思われる。
- ・記述式の回答でも肯定的な意見が多かった。また、システムの改善を求める建設的な意見も多数寄せられており、納入業者に連絡することも含めて、今後に生かしたい。

なお、参考までに、千葉大学で2003(平成15)年度にCALLによる英語を履修した全学生に対して行ったアンケート調査の結果(表3)を、高橋(2004)より紹介する。ここでも、学生がCALLに対してきわめて好意的であることがわかる。

表3 千葉大学でのCALL教材・授業に対する評価結果(中央値)

内容に興味を持った	はい	○	+	+	+	+	いいえ
各種情報は役に立った	はい	○	+	+	+	+	いいえ
徐々に聞けるようになった	はい	○	+	+	+	+	いいえ
聞き取り力がついたと思う	はい	○	+	+	+	+	いいえ
学習は楽しかった	はい	○	+	+	+	+	いいえ
語彙学習は記憶に残る	はい	○	+	+	+	+	いいえ
語彙テストの回数は適切	はい	○	+	+	+	+	いいえ
週平均学習時間	5時間	+	+	○	+	+	1時間
別の教材でも学習したい	はい	○	+	+	+	+	いいえ
この授業を取ってよかった	はい	○	+	+	+	+	いいえ

こうしたCALLに対する学生の肯定的な評価が、学習動機を高め、学力向上に寄与すると考えられる。竹蓋(2002)によれば、通常の大学の授業におけるCALLでの自習で、年間(半期または通年)にTOEIC 60~70点の上昇がコンスタントに得られることが繰り返し観測されており、すべての条件を理想的に近いものに揃えられる実験室環境では、20時間で100点上昇というケースも、4組延べ21名の被験者で、繰り返し観測されたという。

4. CALL教室の設置と「オープンCALL」

以上の成果を携えて、和歌山大学のキャンパス内に専用のCALL教室が必要であると大学執行部に訴えた結果、2009年度より共通教育棟内にCALL演習室が設置された。それ以前はシステム情報学センターの演習室で実施したが、一般の学生が誤って入室してくる事例が少なくなかった。そのため、集中力が妨げられ、試験に弊害が出ることもあった。

また、筆者は教育学部の専門科目である「L.L.演習」(その後「CALL演習」と改称)を担当していたが、共通

教育棟の2回にあったLL教室はビデオテープやカセットテープによる旧式なものであり、コンピュータ・ベースのCALL時代に対応できる教員を養成する上で大きな支障となっていた。

とりわけ、教育学部附属中学校に最新設備のCALL教室が設置されていながら、大学キャンパスには存在しないために、教育実習生を事前に訓練できなかった。こうした「逆転現象」を早急に克服すべく、本研究でその一端を示したように、CALLシステムの効果を検証したのである。その結果、2009年度に約3,200万円の予算を投じてCALL演習室が設置された。

その際の課題は、附属小・中学校などとの連携によるe-learning/CALLの活用を進めることだった。中学校の英語担当教員との間では連携活動を開始していたが、小学校で外国語活動が実施される状況の下で、小学校での英語教材の整備、指導技術の向上、教員養成と研修等も必要となった。

そうしたニーズに応えるために、附属小中学校の教員と連携し、CALLやe-learningシステムを活用することで地理的・時間的な制約を克服し、教材(コンテンツ)の開発および指導技術の研究と実践交流を図ることが重要である。

この他、CALLには馬本(2009)のような多様な活用方法があり、豊かな可能性を秘めている。

そうしたメリットはあるものの、CALLの扱いに慣れていない教員にとっては、日々の授業で活用するには敷居が高かったことも事実である。実際に、恒常的にCALLを使用する教員(常勤・非常勤)は3～4人程度であった。率にすれば語学教員の2割程度である。

そのため、CALLの稼働率を上げ、外国語学習に活かしてもらうべく、2011年2月より「オープンCALL」を開始した。これは、利用登録さえすれば、放課後のCALL演習室で自由にシステムと教材を利用してもらえる制度である。

演習室の管理と監督にはアルバイトの学生を充て、その予算は学長裁量経費を充当した。

しかし、やはりここでも悩みは利用率の低さだった。そのため、費用対効果の乏しさゆえに、結局は3年間で予算配当を打ち切られ、2013年度限りで廃止された。

5. おわりに

実践を通じて浮上した問題点として、2点指摘したい。第1は、CALLシステムの維持にはメンテナンスや更新に費用がかかるため、継続的な予算計画が必要だということである。第2は、CALLシステムと同演習室

の運営には、それを所轄する事務部門(せめて担当の事務職員)が必要だということである。

ところが、事態は深刻である。国立大学法人の運営費交付金は、小泉内閣の「骨太方針2006」以来、毎年1%ずつ削減され、その後10年間で1割以上削減された。こうした中で、筆者らが苦勞の末に獲得したCALL演習室は、予算不足によりコンピュータの更新ができず、2014年度を最後に閉鎖された。そのため、その後のCALL演習はコンテンツや機能等を大幅に縮小して、システム情報学センターの演習室での実施を余儀なくされている。

また、筆者の所属する教育学部英語教室では過去6年間で8人中3人の教員が退職したが、人件費削減の圧力が高まったため後任補充はゼロで、増え続ける仕事に5人で対応している。他の教室でも類似の事態となっている。

こうした実態を放置したまま、仮に外部競争資金等によってCALLやe-learningシステムなどの設備を補充したとしても、満足な教育ができるとは思えない。教育は本質的に人と人との関わり合いの中でしか達成できない。CALLやe-learningは、あくまでそのための補助手段にすぎないことを強調したい。

【謝辞】

広島大学情報メディア教育研究センターの前田啓朗先生(1974–2014)には、同大学のCALLシステムを見学させていただいた上に、導入や活用に伴う多岐にわたる留意点をご教示いただいた。厚く感謝申し上げますと共に、その早すぎる逝去に心から哀悼の意を表したい。

＜主要参考文献＞

- 馬本勉(2009)「ICTを活用した『歴史的』英語指導法の研究(1) DTR学習法導入の試み」『生命環境学術誌』第1号、県立広島大学
- 神田明延(2006)『CALL導入と運用：より良い語学教育環境を目指して』国際語学社
- 高橋秀夫(2004)「CALLを英語指導の中心に据えて」『英語教育』2004年7月号、大修館書店
- 竹蓋幸生(2002)「シンポジウム 実践：CALLによる英語教育」電子版(www5e.biglobe.ne.jp/~takefuta/pdf/symposium.pdf 2017年9月14日検索)
- 竹蓋幸生・水光雅則(2005)『これからの大学英語教育：CALLを活かした指導システムの構築』岩波書店
- 中川準治(2003)「CALL教室におけるインターネットを利用した英語教育」『教育情報研究』Vol.19、No.1、日本教育情報学会

